俳句　大津俳句会

青空の降りてきてゐる初桜　井芹眞一郎

反復を習ひにせよと説く初音　岩崎由美子

つくづくし土手に人佇つ影もなし　大塚喜久子

ひらひらと光あまねく春の蝶　岡崎　浩子

雨後のしぶきの勢ひ春の川　佐賀　久子

磴のぼりふと出会ひたる初桜　佐澤　俊子

俳句　つのはな句会

気鬱の手　立春の水ほとばしる　志賀　孝子

母の年齢こえて今年の桜かな　田上　公代

によきによきと躑躅の里にビルラッシュ　木庭　杏子

新しい靴下履いて朝うらら　上杉　波

地球儀にいくつもの壁春深し　矢嶋　道子

燕来る海越え苦を越え　家の軒　梅木トキエ

風光るくまモン電車ピンク色　塚本　洋子

天空の黙より生れて　春の月　榮田しのぶ

落ち葉踏む音柔らかき春隣　村田　健二

短歌　大津短歌会

御門主は世の安穏を願はれて吾ら信徒の集いも明し　管野　静

寒空の星の煌き眺めつつキウィの人等は逃げまどうらん　豊岡ミツル

そびえ立つ梅檀の木は鈴の実を枝々に下ぐ夕の光りに　小平　善行

初春の霜おく庭に幼子の眼のごとく木瓜の花咲く　吉永　恵子

土鍋ゆれ芹の香立ちぬたふたふと七草粥は今炊きあがる　坂本　杲子

山あいの古溜池に淡雪の舞うて沈みて水の上に消ゆ　鞍　岳志

酒を呑みては歌い踊りしこの夫も芋きんとんを旨かあと食ぶ　山本　泰子

阿蘇山は野焼きのころか幾筋の白けむりみせ春立つらしも　吉田　良子

やわらかき陽ざしを「眩し」と言う兄の横顔痩せたり退院の朝　荒木　麗子

名札読みその後見出す友の顔互いに笑う五〇年経て　田中　玲子